

3 · 書 叢 亞 細 亞 新

動 運 族 民 方 南

輯 監 部 輯 編 亞 細 亞 新 局 查 調 濟 經 亞 東 鐵 滿

刊 店 書 和 大

新亞細亞叢書刊行の辭

滿鐵東亞經濟調查局が、西南亞細亞並に南洋諸島に關する知識の普及を志し、此等諸國の政治・經濟・文化の各方面に亙る最も信賴すべき報道者たることを期して、雜誌『新亞細亞』を創刊したのは、昭和十四年八月のことに屬する。當時は支那事變發生してより二周年、支那に關する著作又は定期刊行物は巷間に氾濫し初めて居たが、支那以外の亞細亞事情を國民に報告する著作は、尙未だ曉天の星の如く稀であつた。既に『新亞細亞』の創刊の辭に於て明言せる如く、東亞新秩序建設のための戰は、獨り支那に於て戰はるるのみならず、やがて全亞細亞を其の舞臺とするに至るべきを信じたるが故に、亞細亞の復興と新亞細亞の建設とを至心に念願する各方面の權威者の援助と協力とを仰ぎつゝ、所期の目的を達成するために善戰して來た。

やがて皇軍の佛印進駐となり、次で對米英宣戰の布告を見るに及んで、國民の關心は俄然として南方に集注せられ、之と共に『新亞細亞』既刊號の注文が四方より殺到するに至

つたが、其の多くは既に品切となつて折角の要望に應へることが出来ない。依て滿鐵東亞經濟調査局「新亞細亞」編輯部は、斯かる要望に應へると同時に、南洋及び西南亞細亞に關する正確なる知識を普及せしめんとする本誌創刊の使命に鑑み、茲に「新亞細亞」既載の諸論文を體系的に整理し、茲に「新亞細亞叢書」全五卷を第一期として刊行することとした。輯むるところは創刊號より昭和十七年三月號までの諸論文より、夫と適當なるものを選んだ。

昭和十七年四月

大川 周 明

編纂者の序

『南方民族運動』について

大東亞建設の究極の問題が、大東亞諸民族の共榮と提携にあり、これら諸民族をして『各々その所を得さしめる』ことにあるとすれば、民族についての理解は先づ第一に要請される問題である。而も、從來南方民族問題及び民族運動については、研究せられるところ少きに過ぎる憾みがあつた。これらの諸民族が如何なる生態を持ち、特に如何なる制度と組織の下に於て英・米・蘭等諸勢力からの吸取を餘儀なくされてゐたか、且つ、それに對して彼等は如何に解放と自主との旗を擁してゐたかは、必ずしも明確に把握されてゐなかつた。『諸民族への途』はまだ拓かれてゐなかつたのである。

大東亞戦争による南方諸地域からの英・米・蘭等勢力の掃蕩は、必然にこの『諸民族への途』を打開し、われわれは面と向つてこれら諸民族と亞細亞復興を語り、相携へて世界

史的建設に乗り出すことになつた。

四

然し、異つた歴史と、政治形態と文化とを有する二つ或はそれ以上の民族が相會し、それを一つの高い世界史的目標に向つて統一協力する場合に行はれる「民族接觸」には、極めて複雑な問題が介在する事を見落してはならない。それは從來ヨーロッパの諸國が植民地に對して用ひて來た直接統治か、間接統治かといふ問題とは、自ら性質を異にするのである。

だが、われわれはこの複雑な問題の存在を焦急に無視したり、その解決を不明朗にしてはならない。輝しい亞細亞建設の巨歩はすでにすゝめられてをり、民族共榮の基礎は築かれてゐるのだ。われわれは米・英・蘭等との戦ひを戦ひつつ、而も南方諸民族の反米・英・蘭的感情を更に近代的な政治意識にまで高めてゆかねばならない。

それには先づ南方諸民族の歴史的な地位を知り、その政治意識を正確に認識し、何よりも民心を把握することを怠つてはならない。そのみがわれわれ自身の權威と恩愛とを彼等に理解せしめる唯一の途である。

こゝに收めた諸論策はいづれも南方諸民族の問題を取上げたものゝみであり、第一篇に

於ては大東亞戰爭後に於けるこれ等諸民族の動向を見究めることから始まり、回教民族工作の問題にも觸れ、第二篇に於ては植民政策との關係に於て、民族問題並びに民族政策は如何なる意義を有してゐたかを扱ひ、第三篇に於ては各地域別にインドネシア、佛印、印度、ビルマ、泰の民族運動及びその一翼としての青年運動の實情について、いはゞその『實績』を述べたものである。

眞に大東亞戰爭の世界史的意義が現實に示されるのは、この民族政策及びその成果を中心としてあることを信ずるわれわれは、これらの諸論策の批判し、解説し、示唆するところが、今後の『民族接觸』及び『民族指導』の上に、必ずやよき刺激となるべきことを信じて疑はない。

なほ、第一篇は大東亞戰爭後の現地視察にもとづいて執筆されたものであり、他はどれも戰爭以前の執筆によるものであることを特に附記する。

御多忙中にも拘らず、校正加筆の勞を賜はつた御執筆の諸氏に謝意を表したい。

昭和十七年十月六日

『新亞細亞』編輯部

目次

【新亞細亞叢書】刊行の辭……………大川 周 明(一)

【南方民族運動】について……………【新亞細亞】編輯部(三)

第一篇 大東亞建設と南方民族運動

インドネシア復興途上の課題……………岩 隈 博(二)

南方圏政策の諸問題と現況……………須 山 卓(四)

インドネシア回教工作について……………小 野 信 次(五)

第二篇 植民政策と南方民族問題

アジア諸民族の運命……………加 田 哲 二(九)

植民政策と民族運動……………	堀 眞	琴(二七)
民族政策と南方問題……………	平 貞	藏(二四)

第三篇 南方民族運動の歴史

インドネシアの民族運動……………	ダ ル	マ(一五)
一九四〇年に於けるインドネシア民族運動……………	ダ ル	マ(一〇一)
インドネシア民族運動の進展……………	大 江	恒 太 郎(二三)
佛印の民族問題……………	松 本	信 廣(二四)
印度獨立運動の實勢……………	伊 東	敬(二六)
印度・ビルマ・泰の青年運動……………	H・ラーミ	ア(二七)

目次

寫眞目次

- 1 ガンディ翁
- 2 ネール氏(中央)
- 3 アザド博士(右)
- 4 ラムガル大會に於けるビルマ代表
- 5 ビルマ義勇軍
- 6 ビルマ學生聯盟の反英抗爭(一九三八年)
- 7 東印度の回教徒
- 8 東印度の回教婦人

第一篇 大東亞建設と南方民族運動

インドネシア復興途上の課題

岩 隈 博

—

わたくしは「インドネシア」(註)といふ民族的表現が、東インドの住民の間にどれほどの普遍性をもつてゐるか、について長い間かなりの疑問を抱いてゐた。例へば「インドネシア眞正議會の獲得」といふような政治上のスローガンが、はたして大衆的基礎をもつものであるかどうか、すなはちその社會的浸透度を測定することによつてインドネシア民族運動の民衆性、民族的結合力をも測定することができる、と考へてゐたのである。假に七千萬の人口に統一的な基礎を置くことに成功してゐるならば、今後われわれとしても大東亞共榮圈内の單なる少數民族運動として

看過することは許されないからである。

〔註〕「インドネシア」といふ言葉は始めて一八五〇年に Logan によつて人類學上の用語として使用せられたとせられるが、一八八四年以來 Dr. Bavin が更にそれを同様の概念に於て捉へ學問上の普遍性をもつに至つた。従つてこの語の本來的な意義はインドネシア言語族に屬するマダカスカル、臺灣、パース島、ニュー・ギニアランドに挾まれる廣大な地域の人類を包括するものであるが、今世紀の初め頃より舊蘭印群島の民族主義者はこれを政治的概念に轉化し、一九三九年以來タムリン動議として屢々政府にこれが公用語としての使用を迫るところがあつたが、一九四一年來オランダ政府も遂に舊來の土民なる侮蔑的用語を廢して「インドネシア」に置き換へるに至つた。

わたくしは最近極く短い期間ではあつたが、未だ戦火も熄まぬ破壊と建設の騒音高きジャワとスマトラの一部分を視る機會を得、この疑問をある程度解決し得たと思つてゐる。すなはちわたくしは行く先々の住民に對して「汝は何人か」といふ質問を提出し、そうしてその返答のうちに「吾はバレンバン人である」「吾はバタビア人である」「吾はマライ人である」「吾はスンダ人である」といふふうな種族的區別に従つた答辯を寧ろ要求し、又そのやうに誘導したのであるが、答は一樣に「オラン・インドネシア」といふに盡きた。かれ等のこうした認識の衝動に接したわた

くしは心につきたあるものを感じ、かれ等の晴れやかな面差を凝視したものである。

シャム國がタイ國と、ペルシャがイランと改稱した事實が、端的に諸民族の燃え上がりつつある意向を表示したものであると同様に、インドネシアといふ名稱の使用を提議し且つそれを社會的に實踐するに至つたことは、一定の民族的精神の充實を背景とするものである。

またわたくしはジャワに於てインドネシア民族運動の幹部たちと語つた際、ヨーロッパ聯合軍の膝下に餘りにも早く脆伏したことは、インドネシア民族精神の熱意をわれわれに示す機會を永遠に失つたといふ意味では大變不幸であつた、といふ意味のことを述べたことによつて、かれ等が内部よりヨーロッパに對する暴力的反抗の準備を進めてゐたことをも示唆されたのである。

かくの如くわたくしは單にインドネシアの民族感情を通じて直觀したに過ぎないが、インドネシア民族精神の全體的昂揚は既に否定し得ない事實であるやうに思ふ。

ヨーロッパの支配に反對するインドネシアの共通の感情は、非常に遲れて漸く今世紀に入つて組織的な形貌をととのへたに過ぎないが（その契機は日露戦争と辛亥革命とされる）近來頗る充實過程を辿り、ソ聯の植民地・半植民地反帝闘争のテーゼに於ても、インド、支那と並んで取上

げられるていの重要地區にまで成長してゐたのであるが、皇軍の蘭印上陸を機會として正に頂點に到達した觀があるのである。

かくしてインドネシアの民族運動はヨーロッパの支配權への對立的要素としては一應發展的な解消を遂げたわけであるが、民族の生存といふ立脚點からすればヨーロッパの軍隊が潰滅したその瞬間に於て、われわれの政策に對して改めて批判的立場を獲得した、といふことが云へるであらう。

そこでその批判はどういふ角度からなされるであらうかといふことは、われわれとして一應深く考へてみなければならぬ問題であるやうに思はれる。これがためには先づインドネシアの民族運動史を振り返つてみなければならぬ。

一般に東洋の民族論の主潮は非合理主義を基底にもつ。同じ全體主義的民族國家論にしても日本とドイツではこの點で袂別するものであるやうに思はれる。インドネシア民族運動も亦東洋及東洋人を地盤として生成發展したものである。一九二七年にハッタ博士の領導するブルヒンブナシ・インドネシアは次のやうな思想を公けに發表してゐる。「世界政治の焦點太平洋に於ける東イ

インド群島の位置が、極西の白蠻の殘酷なる壓迫に對して要求を貫徹するまで反抗を繼續すべき一體感に共通するアジアに、われわれを結びつけた。」これはアジア連帶思想、換言すれば日本に謂ふところの大アジア主義の率直な表明であらう。またわたくしが面接したインドネシアの民族主義者も、本能的な同族意識によつてアジアの精神的統一が可能である、といふふうに考へてゐた。この觀念傾向はアジア固有のものであり、インドネシアの血液の中にア・プリオリとして與へられてゐると考へられるが、こゝからはわれわれに對する批判的態度は現れない。寧ろその逆に、われわれとかれ等との親近感情の源泉をなすものである。われわれの出先機關が行つてゐる「アジア人のためのアジア」、「同色同種」「大アジア萬歲（ヒドゥッ・アシア・ラヤ）」など一聯の宣傳標語はこの感情層に訴へるものである。この方法は心理的には深い根柢をもつものではあるが、しかし非合理主義に立脚する點では素朴であるといはざるを得ず、またここに儉安の源泉を求めることは危険である。

帝國主義下の植民地では民主主義的民族主義と共產主義とは鬭争の一定の段階に於ては妥協し得るのが一つの原則になつてゐる。インドネシアに於ても一九二五年——二六年のジャワの大暴

動は共產黨のイニシアティヴによつて組織され、デモクラットの参加の下に敢行されたものである。一九二六年の十一月にハーグで、先にあげたハッタの民族主義黨とインドネシア共產黨代表スマウンは「強力なる國民運動を要望し、このものを通じてインドネシア獨立運動の爲めの國民力の統一を期待し得る」との考慮に基き次の事項に於て一致の行動を密約してゐる。

第一、舉國的インドネシア民族黨にまで發展しなければならぬブルヒンブナン・インドネシアはインドネシア民族運動の祝福のために政治的社會的領域に於て活動しなければならない。ブルヒンブナン・インドネシアはインドネシア民族運動を指導し、その全責任を負擔しなければならない。社會問題とは國民教育、國民經濟、國民保健及び國民力の涵養に必要な一切の事項を包含する。

第二、パルタイ・コンミュニス・インドネシアはブルヒンブナン・インドネシアの如上の指導力を認め、全幅の信頼を與へねばならぬ。パルタイ・コンミュニス・インドネシア及びその下に來る諸組織はブルヒンブナン・インドネシアが獨立のための政策を遂行する限りに於てその指導すべき舉國的民族運動に對し何等の反對を示さない。